

業界の課題でセミナー

AIや鶏卵流通など

日本養鶏産業研究会 さいつした加藤会長は「今回は鶏卵のマーケットがどのように動いているのかを一つのテーマとし、市場に近い視野で考えていきたい。このほか興味深いテーマの情報をまとめてきたため、参加者の皆さんからも意見を出していただいて、研究会を主催者を代表してあい



新型インフルエンザのパネルディスカッションも行った日本養鶏産業研究会のセミナー

盛り上げてほしい」などと述べた。

福島県養鶏協会の三品清重会長（㈱アグリテックノ社長、福島県農林水産部畜産課の鈴木弘課長（代読）が来賓あいさつし、㈱ピーキーキューシー研究所の白田一敏業務本部長が座長や講師、助言者らを紹介してセミナーに移った。

第一部の「高病原性鳥インフルエンザに関する情報提供」（座長 合田光昭 J A あいち経済連農畜産物衛生研究所技術参与）では、鳥取大学農学

部の伊藤壽啓教授が「東アジアにおける高病原性鳥インフルエンザの情勢」、加藤会長が「豊橋市で発生したウズラ高病原性鳥インフルエンザ（H7N6）および韓国で市販されている鳥インフルエンザワクチン（H9N2）について」、白田業務本部長が「福島県における野生水禽類からのインフルエンザウイルス分離状況」と題して講演した。

伊藤教授は、二〇〇六年からベトナムで行なっている鳥インフルエンザウイルスの実態調査について「〇八年一月に、ハノイ近郊のアヒル農場でH5N1亜型の鳥インフルエンザウイルスが分離された。一日で鶏を八羽も殺す強毒型であったが、ウイルスを保持していたアヒルには全く症状がなかったため、アヒルでのサーベイランスが極めて重要だと考えられる」などと述べた。

加藤会長は、豊橋養鶏農協の幡野正二組合長らから聞いた鳥インフルエンザ発生経験談と、韓国で使用されているH9N2亜型の鳥インフルエンザワクチンの概要を紹介した。

川村悦春中部飼料（㈱研証）、PASCOの奥田和久代表が「鶏卵流通における安売り卵の実態調査報告」と題して講演した。

この中で奥田代表は、特売卵に関する消費者へのアンケート調査結果について、①特売卵の品質は五九〇の人が通常品と同じと評価している②パック一四〇円以下だと特売のイメージがある——などと紹介した。

第二部の「米国のDDGSの使用実情」（座長 加藤会長）が参加者からの質問に答えながら議論した。

加藤会長が「この研究会の目的は、業界の問題をみんなで語り合うことで実感し、解決の方向性を模索するきっかけを提供することである。卵の値段が多少高くても購入してくれるリピーターを作る戦略の人と、安いコストで卵を生産して供給する戦略の人の意見は異なると思うが、それぞれ」などと総括し、二日間の日程を終えた。

第三部の「鶏卵流通における品質評価ならびに安売り卵に関して」（座長 白田業務本部長）では、㈱イトーヨーカ堂C室食品担当で東京海洋大学講師の伊藤正史氏が、集団食中毒など過去十年の食品に関するトラブルを紹介し、㈱アグリテックの伊藤幸二GPPセンターリーダーが「鶏卵の品質評価についての検

証」、PASCOの奥田和久代表が「鶏卵流通における安売り卵の実態調査報告」と題して講演した。